

自分事として課題を捉え、考えを深める青年期の道德教育 ーモラルジレンマ物語課題に読み物資料を導入した場合の検討ー

To promote ego involvement for task solution and considering tasks in adolescent moral education:

Do reading materials help solve moral dilemma story tasks?

小澤 理恵子*

OZAWA Rieko

要約：道德が教科化され、「考え・議論する」道德へと転換が図られ、道德科の指導は、読み物教材の登場人物への自我関与中心の学習、問題解決的学習など、道德的な課題を自分事として捉え、考えを深め、自分で判断し行動へとつなげる方法が求められている。そこで、読み物資料の導入によりモラルジレンマ物語課題への自我関与を高め、課題を自分事として捉え考えを深める試みを、青年期後期の大学生に対して行った。その結果、読み物資料読後にはモラルジレンマ物語課題を自分事として捉え、メタ認知などの自己理解が深まる可能性が示された。

キーワード：道德教育の指導方法 自分事として課題を捉える 自我関与 モラルジレンマ物語課題 読み物資料 考える道德教育 青年期

I はじめに

学校教育における道德教育は、平成 27 年 3 月に「特別の教科 道德」と学習指導要領に位置づけられた。それまで小・中学校で週 1 時間行われてきた「道德の時間」は、教育再生実行会議の提言（平成 25 年 2 月）、および、中央教育審議会の答申（平成 26 年 10 月）を踏まえ、「教科外」から「特別の教科 道德」となった。小学校は平成 30 年度、中学校は平成 31 年度から検定教科書を使用した「道德科」が実施される予定であるが、それに先駆け学校現場では、平成 27 年度から改正の趣旨を踏まえた取り組みが可能となった。

「道德科」への移行は学校教育における道德教育の転換、「考え、議論する道德」への転換である（文部科学省、2015a）。本稿では、道德の教科化によって目指される道德教育の質向上のポイントとして、自分事として課題を捉え、考えを深める指導方法に焦点を当て、大学生に対して行った問題解決的な学習の結果を基に、道德教育の指導方法の検討を行う。

II 「道德の時間」から「特別な教科 道德」への改訂の経緯

「21 世紀の日本にふさわしい教育体制を構築し、教育の再生を実行に移していくため、内閣の最重要課題の一つとして教育改革を推進する必要がある。このため、『教育再生実行会議』を開催する」（注 1）として、平成 23 年 1 月 15 日に閣議決定された教育再生実行会議は、平成 25 年 2 月 26 日、いじめ問題等への対応についての第一次提言を行った。この提言の最初に示されたのが「道德の教科化」であった（注 2）。

* 非常勤講師

これを受けて、平成25年3月、文部科学省に「道德教育の充実に関する懇談会」が設置され、同年12月、懇談会による「今後の道德教育の改善・充実方策について」の報告がまとめられ（注3）、「特別の教科 道德」（仮称）が提言された。戦後、道德教育は学校教育全体を通じて行われてきたが、昭和33年改訂学習指導要領で、小学校および中学校に各学年週1時間の「道德の時間」が設置され、「道德の時間」は学校の道德教育の「要（かなめ）」とされてきた。この「道德の時間」の役割を引き継ぎつつ、さらに道德教育の抜本的な改善実現のためには、教育課程で教科と位置づけられてこなかった「道德の時間」を「特別の教科 道德」と位置づけ、関係法規や学習指導要領の改訂に早期取り組むことが示された。「教科化」に伴って、検定教科書の導入、数値による評価は不適切だが評価は行うなどが示されたのである。国語や算数・数学などの主要教科に比べ軽視されがちな「道德の時間」が、「特別の教科」として位置づけられることで、重要性の認識が強まることが期待されている。

平成26年2月、中央教育審議会は文部科学大臣から「道德に係る教育課程の改善等について」の諮問を受け、その後の審議を経て、同年10月21日に答申を提出した（注4）。答申では、「道德の時間を教育課程上『特別の教科 道德』（仮称）として新たに位置づけ、その目標、内容、教材や評価、指導体制の在り方等を見直すとともに、『特別の教科 道德』（仮称）を要として道德教育の趣旨を踏まえた効果的な指導を学校の教育活動全体を通じてより確実に展開することができるよう、教育課程を改善することが必要と考える」（文部科学省、2014）、と記されている。そして平成27年3月27日、文部科学省は、学校教育法施行規則において「道德」を「特別の教科である道德」に改正し、小学校、中学校などの学習指導要領の一部改正を告示し、さらに教科書検定についての報告（平成27年7月）や、道德の評価のあり方についての報告書も順次とりまとめ（平成28年7月 注5）、正式な教科化に向けて準備を進めている。

Ⅲ 道德教育の転換点

1. 「考え、議論する」道德へ

道德の教科化の動きによって、道德教育はどのような変化・転換を図ることが期待されているのだろうか。

中学校の「学習指導要領解説 特別の教科 道德編（平成27年7月）」によれば、今回の改正については以下のように述べられている。

「今回の改正は、いじめの問題への対応の充実や発達の段階をより一層踏まえた体系的なものとする観点からの内容の改善、問題解決的な学習を取り入れるなどの指導方法の工夫を図ることなどを示したものである。」（文部科学省、2015a）

道德科の「内容の改善」と「指導方法」が改正のポイントとされ、とりわけ指導方法の工夫については、問題解決的な学習など、子どもが主体的に課題に取り組み、解決を生み出すような指導方法の取り入れが望まれている。

道德教育の指導方法の工夫・改善に関しては、以下の記述にも明確に示されている。

（先の引用箇所の続き）「このことにより、『特定の価値観を押し付けたり、主体性をもたず言われるままに行動するよう指導したりすることは、道德教育が目指す方向の対極にあるものと言わなければならない』、『多様な価値観の、時に対立がある場合を含めて、誠実にそれらの価値に向き合い、道德としての問題を考え続ける姿勢こそ道德教育で養うべき基本的資質である』との答申を踏まえ、発達の段階に応じ、答えが一つではない道德的な課題を一人一人の生徒が自分自身の問題と捉え、向き合う「考える道德」、「議論する道德」へと転換を図るものである。」（文部科学省、2015a）

ここには、価値の押し付けや子どもの主体性を無視する指導は道德教育の目指す方向ではないという中央教育審議会の指摘がそのまま引用され、価値の押し付けにならない指導、教師などの指導者に指示されるまま、自分の思考を停止した状態で行動する人間を育てることのない教育を求めることが明示されている。さらには、多様な価値観との遭遇や、価値対立への直面に誠実に向き合い、「自分事」として課題を受け止め、他者と議論し、考え続ける力の育成を目指すことが明確に示されたのである。

「考え、議論する」道德への転換点とは、子どもたちが迎える今後の社会、それは、答えの定まらぬ課題が次々と立ち現れ、これまでの時代には遭遇したことの無い未知なる課題や問題に直面することを想定し、一人ひとりがその解決を模索しながら自立した存在として生き抜くために必要な資質・能力の育成を目指す教育につながるものである。平成28年8月に、中央教育審議会において次期学習指導要領の改訂に向けた議論のとりまとめが示された(注6)。そこでは、多様な価値に溢れる世界や他者と出会い、関わり、議論し、協力しながら最善の解を模索・創造する資質・能力の育成が目指され、その資質・能力の育成には「主体的・対話的で深い学び(アクティブ・ラーニング)」の実現が掲げられている。子どもが能動的に学び、学習内容を深く理解し、日々の生活や自らの生涯につながる、生きて働く質の高い学びを実現するため、学校で子どもが「どのように学ぶか」、即ち、学校教育場面における指導方法の改善が求められているのである。21世紀を見据えた教育で「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、学校の教育指導方法が大きく変わろうとしており、その変革は道德教育にも及んでいる。

2. 課題を自分事として受けとめる指導方法

「主体的・対話的で深い学び」とは、知識獲得に重点を置いた形式的な指導、知識を権威あるものとして受動的に吸収することに終始する学習から脱却し、子どもが主体的に考え、問題解決を目指して試行錯誤を粘り強く続け、新たな解を創り上げ、納得できる結論にたどり着き、判断の主体である自覚のもとに決断し、実行する資質・能力の育成に向かうことである。

21世紀型の資質・能力を育てる教育への大きな転換が図られていく中で、道德教育の指導も、子どもの主体性を重んじ、「考え、議論する」活動を主軸とした指導への変化が求められている。平成28年7月に示された『特別の教科 道德』の指導方法・評価等についての報告では、道德科の質の高い指導方法として、①「読み物教材の登場人物への自我関与が中心の学習」、②「問題解決的な学習」、③「道徳行為に関する体験的な学習」があげられている(道德教育に係る評価等の在り方に関する専門家会議、2016 注5)。これらの指導方法の共通点は、「自分との関わり」に重点が置かれていることである。①の読み物教材による指導においては、「自我関与」の言葉が示すように、登場人物の気持ちを自分事として多角的・多面的に考えることである。②問題解決的な学習は、問題状況を自分に当てはめて考える、問題や課題を自分との関わりで捉えて考えること、自分の考えの根拠を問い直すなど、自分事として捉え、考え、結論を出すプロセスを重視するものである。③体験的な学習では、役割演技などの体験により、自分なりに問題を理解し、考え、行動化につなげ、自分自身の実感を伴って学びを深めることである。つまり、道徳的課題を、自分事として捉え、考え、行動する資質・能力の育成が期待されるのである。

道德教育において、課題を自分事として受けとめ、自分と結びつけて考える活動を促す指導の一つに、道徳的な価値の葛藤・対立であるモラルジレンマを含む物語課題を取り上げることができる。

モラルジレンマを含む物語課題(以下、モラルジレンマ課題という)は、道徳性発達の研究者であるコールバーグ(Kohlberg, L.)が、「正しさ」の発達について調べるために用いた道徳的な葛藤・対立を含む物語であり(荒木, 1988)、日本の小・中学校においても道德の授業で活用され、授業実践事例が紹介されている(荒木, 1988, 荒木 1997)。平成27年の改訂『学習指導要領解説 特別の

教科『道徳編』によれば、道徳科における問題解決学習とは、「生徒一人一人が生きる上で出会う様々な道徳上の問題や課題を多面的・多角的に考え、主体的に判断し実行し、よりよく生きていくための資質・能力を養う学習」（文部科学省，2015b）と示されている。モラルジレンマ課題は、道徳的な価値の対立・葛藤状況が物語の中に埋め込まれていて、現実場面を想像しながら葛藤解決を考える問題解決学習である。つまり、子どもが人生で直面する諸課題が具体的な状況で現れ、簡単に答えの出せない課題解決に向けて、自分なりに考え決断を下す活動を含むものである。課題を自分事として受けとめ、深く掘り下げて考える活動を含むため、「考える」道徳の指導方法として取り上げ、検討する価値があると考えられる。

さらに、読み物資料の自我関与を中心とする読み取りも、自分事として課題を受けとめ、考える活動につながるものとして重視できる。読み物資料は道徳の授業の教材としての活用頻度が高く（注7）、その有効な活用方法の検討が求められている。問題解決学習に読み物資料を加えることで、課題を「自分事」として受けとめ、「考える活動」が一層活性化されると考えられる。そこで、モラルジレンマ課題への取り組みに読み物資料を導入することで、課題への「自我関与」と、課題を「考える」活動がどのように変化するかを検討することにした。以下にその内容を述べる。

Ⅳ 読み物資料を導入したモラルジレンマ課題への取り組みとその結果

1. 読み物資料を導入したモラルジレンマ課題への取り組みのねらい

筆者は、関東圏の大学で教職課程の必修科目「道徳教育の研究」の授業を担当し、そこでコールバーグの道徳性の発達段階の説明と、中学生を対象としたモラルジレンマ課題を用いた道徳授業の紹介を行っている。モラルジレンマ課題に対する中学生の反応や、モラルジレンマ課題を用いた授業を通して中学生の意識がどのように変化するかなど、授業実践を紹介することによって、道徳性発達について理解を深めることがねらいである。また、教育実習を控えた学生に、モラルジレンマ課題のような、問題解決的な指導方法に意識を向けさせ、道徳科の授業構成および指導案作成にもつなげている。このような授業の中で、中学生と同じモラルジレンマ課題を大学生にも取り組ませ、自分と中学生の判断結果や理由を比較し、中学生の道徳的思考に対する理解を深めさせている。

そこで、このモラルジレンマ課題を用い、課題を自分事として捉えること、課題への自我関与を強め、課題について深く考える活動を活性化させるために有効な方法を探るために、モラルジレンマ課題の内容に関わる読み物資料を学生に提供し、課題に対する受けとめ方や捉え方の変化をみることにした。読み物資料の導入が課題に対する自我関与を強め、課題を自分事として捉えることに有効に作用するかを検討する。

モラルジレンマ課題を考える際に読み物資料を導入した理由は、以下の通りである。ここで取り上げるモラルジレンマ課題は、2の（2）に示すように、夫がガンであることを医師から告げられた妻が、そのことを夫に告知するか否かの判断を問う内容である。学生は、ガンについて様々なメディアや周囲の人々から情報を得ることがあるが、実際には、病状や治療の実態、患者がどのように闘病生活を送っているかについては、自分や身近な人が当事者ではない限り知ることはあまりないと考えられる。学生は、病気の状態や患者が抱える課題をある程度想像できるだろうが、断片的に得た情報に頼るため、思考の幅が狭いと考えられる。そこで、ガンの闘病生活を知る手がかりとなるような内容を含む読み物資料を導入した。闘病者の手記や新聞記事を学生が読むことによって、課題を考える過程にどのような影響があるのか、課題を自分に近づけて理解し、自分事としてより深く考える効果をもたらすかについて検討した。

以下に、課題の実施状況と回答結果を示す。

2. 課題実施状況・モラルジレンマ課題および読み物資料の内容

(1) 実施年月 2016年5月

(2) モラルジレンマ課題

モラルジレンマ課題は、丸山屋敏(1997)の「本当の やさしさとは」を使用した。課題の内容は以下の通りである。

「本当の やさしさとは？」

佐藤さんの夫は 売れっ子の小説家です。毎日、忙しい日々を送っています。

ところが、数ヶ月前から体の具合が 思わしくありません。いつも「忙しいよ。時間がないよ」の言葉が返ってくるだけです。実際、佐藤さんは、月刊誌の連載、週刊誌の連載、その他の原稿依頼で、朝から夜中まで原稿用紙に向かっています。

やっと休みがとれた日、奥さんといっしょに病院へ行きました。長い診察が終わって、佐藤さんが診察室から出てきました。

奥さんの「結果 どうでした？」の問いかけに、

佐藤さんは「ああ、たいしたことないと思うよ。働き過ぎだから疲れがたまっただけ。すぐによくなると思う。」と、にこにこしながら答えました。

その後、佐藤さんは次回作の打ち合わせのために出版社に向かいました。

佐藤さんを見送った直後、奥さんは担当のお医者さんに呼び出されました。そして末期がんであることを告げられました。お医者さんの話では、長くて1年、短ければ3ヶ月の命だということです。奥さんは、このことをご主人に話そうか、黙っていいようか迷いました。

以上の課題文に目を通した後、以下のような指示を板書し、約5分の回答時間をとった。

「あなたが佐藤さんの奥さんならば、どうしますか。病気について ①告知する、②告知しない、③わからない・決められない、の3つの中から1つを選択し、その理由を書いてください。」

(3) 読み物資料

読み物資料は、ガンの告知を受けて、闘病生活を送っている1名の手記と1名の新聞記事である。実際には新聞の記事をそのまま印刷し、各自に配布している。ここでは、配布資料の概要を以下に示す。

手記：絵門ゆう子氏の『絵門ゆう子のがんとゆっくり日記』(2004年12月2日 朝日新聞朝刊掲載)の概要

朝起きて見ると、食卓の上が片付いていない。そのまま家事をしながら体調の変化を感じ、病状の悪化、主治医の言葉を思い出しながら、不安に駆られ、片付けをする気も失せ、パソコンに向かう。夫がきて、食卓を片付けてからすればいい、と言われ、「わかってくれない！」となる。

こうした伏線があり夫に八つ当たりすると話すと、患者仲間も同じ体験をしていて、話しが盛り上がった。体調のわずかな異変、病気の情報、頭の中はいつもがんにかかわる思いがかけめぐり、それを口に出さないから周囲はわからない。笑うこと、今を生きることが大切と自分に言い聞かせながら、小さな体調変化ごとに浮かぶ、泣き出したいような不安を打ち消し続けているのが、がんを抱える仲間の日常である。

「今を大切に生きればいい」の言葉は、患者同士では言い合っても、周りには言ってもらわなくていい。このような言葉を主治医に言われたら、絶望を突きつけられたことになる。治療に当たる人には、最後まで「大丈夫、何とかする」という姿勢で居続けてほしい。

患者は自分の気持ちを萎えさせず、家族を暗くさせないように、精一杯前に進んでいる。必要なのは希望の光を届ける灯台である。病気の状態と命の期限を切り離し、期限はわからない、と、守ってもらい、心の葛藤の存在を感じてもらえたら、優しく、強い思いになれる。

新聞記事：2004年12月2日 朝日新聞朝刊掲載の記事の概要

イラストレーターの河原淳氏（75歳）が、5年間のがんの闘病生活でよんだ句集を出版。闘病生活、句集の内容などを記事としてまとめられている。概要は以下の通りである。

がんで闘病生活をはじめ、治療による体の変化などで暗い気持ちになり、作る喜びを感じて前向きに生きることを考え、句を作ることを思いつく。病床で思いつく作品を雑誌などにまとめて、配布。毎日が楽しくなった。退院2年後に再入院したが、入院生活を楽しくやろうと、句を作り続ける。やがて退院するも、転移がみつかりがんと「共存」する生活を送っている。句集の企画、ミニコミ紙の発行をして、知り合いなどに新作を披露し続けている。

句を詠むきっかけとなったガンに感謝していること、ガンは自分にとって放蕩息子で、時々「暴れるな」と叱ることもあるという。記事で紹介されている句は、

癌学園 卒業できるか留年か、 髪生ゆる リンパ砂漠に 春が来て、 など。

（4）課題実施状況

（2）に示した「本当のやさしさとは」の課題を、1週間の間をあけて2回実施した。

1回目は、「本当のやさしさとは」の課題を配布して、約10分の時間をとり、回答を求めた。2回目は、（3）に示した読み物資料を配付後、「資料を読んで、気がついたこと、考えたこと、感想などを自由に書いてください」と板書で指示し、約15分の回答時間をとり回答を求めた。そのあと、1回目と同課題「本当のやさしさとは」を1回目と同じ指示で行い、約7分の回答時間をとり回答を求めた。

3. 告知判断の結果

モラルジレンマ課題への回答者数は、1回目25人、2回目22人、読み物資料への感想回答者は22人であった。

1回目は、告知する23人、告知しない2人、わからない・決められない0人であった。2回目は、告知する19人、告知しない1人、わからない・決められない2人であった。告知の判断が圧倒的に多く、しかも1回目と2回目で判断変更は3人であった。判断変更は少数であり、変更は、告知する→告知しないに1人、告知する→わからない・決められないに1人、告知しない→わからない・決められないに1人であった。

4. 1回目の判断理由の分類結果

判断理由の内容で分類を行った結果及びその代表例を表1に示した。なお、一人が記述した理由には複数の内容が含まれている場合もあるため、その場合には内容を分けて分類し、人数を数えた。

表1に示す通り、その理由については、「残りの人生を悔いなく、やり残したことなど今後の生き方を自己決定して生きて欲しい」という内容の記述が24人で、最も多かった。夫の「やりたいこと」、「やり残したこと」、「悔いの残らぬ人生」への言及が多く見られ、告知後の夫の人生を思いやる内容である。

次いで多いのは、告知した後の夫の今後を「話し合う」、「共に解決する存在がいることを伝える」など、告知に伴って夫に対する関わり方を「支える」考えが示された。また、告知せずに隠す、嘘をつくことが「辛い」、「信頼を損なう」のように、告知しないことで生じる夫との軋轢や、嘘をつく自分の辛さから告知を選択するという言及もみられた。

その他には、「自分のことは自分で知る権利がある」、「自分の未来は自分で決めるべき」など、知る権利や自己決定を重んじる理由もあった。

告知しない場合では、告知に伴う余命受け入れの夫の辛さ、夫の辛さをともにする自分の辛さが示された。

全体として、病気の重大さや余命に注目し、病気の当事者である夫が悔いを残さぬよう、やり残

しないように今後の生き方を自己決定するために告知が必要、という判断が行われていた。

表1 1回目のモラルジレンマ課題の判断理由の分類結果と代表例

告知する (23人)
<p>1 残りの人生を悔いなく、やり残したことなどの生き方を自己決定して生きて欲しい (24人)</p> <p>①仕事をやりきりたい、家族との時間をとりたいなど、本人が一番後悔しない方法と思う悔いのない人生の終わり方をしてほしい</p> <p>②余命を知ると、いつまでも生きられると思って生活するのでは、生き方がかわる</p> <p>③覚悟を決めて残りの仕事にとりかかって欲しい。そのほうが、仕事に対する後悔は軽減される</p> <p>④嘘を言い安心させると、普段通りの生活を送るだけで、やり残したこともやらずに死んで、未練が残ってしまう</p>
<p>2 自分のことは自分が知る権利がある・決める権利がある (4人)</p> <p>⑤自分のことは自分でしっかり知るべき</p> <p>⑥病気は夫の身の上で起こったことだから、奥さんが隠す必要はない</p> <p>⑦夫の人生は夫のものなので、これから先を夫自身で決めるべき</p>
<p>3 告知して支える (6人)</p> <p>⑧しっかり病気を受けとめて、これからどう時間をつかうか、どう生きるかをしっかりと話し合いたい</p> <p>⑨恐怖に苛まれるだろうから、共に解決しようとする存在がいることを知らせる</p>
<p>4 嘘・告知しない場合に生じる問題 (6人)</p> <p>⑩嘘を貫き通すのは辛い ⑪隠し通せない</p> <p>⑫嘘をつくことで、夫に不快感を与えたり、信頼を損ないたくない</p> <p>⑬隠し続けて夫婦の関係が悪化したら、悪循環になる</p> <p>⑭本人の意思を確認することなく今後を決定するのは辛い</p>
5 その他 (2人)
告知しない (2人)
<p>1 夫の辛さ、他</p> <p>⑮希望を見出すまで時間がかかり、日常生活を送っていても常に命が短いことが頭にあり、気落ちして、抜け殻のようになってしまったら、傍らで見えていても辛い</p> <p>⑯医師とともに3人で話す</p>

5.2 回目の判断理由の分類結果

表2に判断理由の分類結果及びその代表例を示した。表2に示すとおり、判断の理由は、告知をしないと「現実に向き合えない」、告知をして「残りの人生に向き合う」、告知をした方が「これからの人生を考えやすい」など、告知後の夫が病気と向き合い、今後の人生を考えるために告知を行う、という夫を思いやる内容が16人で最も多かった。内容を見ると、1回目の判断では、夫の「仕事」、「やりたいこと」、「やり残したこと」への言及が多いのに比べ、2回目では、「病気と向き合う」、「残りの人生に向き合う」など、告知によって病気や人生と「向き合う」こと、つまり病気を受けとめ、病気を受け入れて生きぬいていくために、告知が必要と考えられている。また、「病気の仲間と励まし合う」、「夫の人間関係」など、告知後の夫の生活に考えを拡げ、同じ病気を抱える仲間との関係

に言及する内容もあり、1回目よりも告知後の夫の生活を具体的に考えて判断を行っていた。

次に多かった理由は、告知によって、「共に病気に向き合っていける」、「(夫と) 治していく相談ができる」、「傍らで支えたり、生きがいに気づかせてあげる」など、告知後のケアについて、夫に寄り添い病気に「ともに向き合う」、「支える」姿勢など、自分が夫を支える存在となることを意識した内容であった。

以上、1回目と2回目の理由付けを比べてみると、2回目の方が、告知によって夫が「病気と向き合う」こと、夫を「支える」自分を意識した判断が行われていた。夫が病気と向き合い、病気を受け入れて「生きる」ことへと考えを押し広げ、夫の人生をどう支えるのか、夫と寄り添って生きる自分はどうかあるべきかなど、告知を自分事として捉えられていた。

この変化は、2回目の判断の前に与えられた読み物資料と関わりがあると考えられる。そこで、読み物資料から学生がどのようなことを感じ、考えたのかを次に検討する。

表2 2回目のモラルジレンマ課題の判断理由の分類結果と代表例

告知する (19人)
<p>1 夫の告知後の生活 (16人)</p> <p>①病気の仲間と不安を共有し不安がやわらぐ ②周囲の人との幸せな人間関係を築ける ③体調が悪い原因をわかっている方が、夫がこれからの人生について考えやすい ④周囲が病状と余命を切り離してあげれば、夫はガンと知っても強く生きていける ⑤体調が悪い原因をわかっている方が、夫がこれからの人生について考えやすい ⑥自分の生き方を見直すきっかけになる ⑦余生をどう過ごすか考えてもらいたい ⑧病状を知らないと現実に向き合うことができない。病気であることと向き合い、生活をどうするか自分で決めてほしい ⑨事実を知っているほうが、自分の残りの人生に向き合える ⑩きちんと残りの日々を生き抜いてほしい</p>
<p>2 家族として共に向き合う・支える覚悟 (7人)</p> <p>⑪共にガンという病気に、向き合っていけるといいと思う ⑫ガンという病気にどう向きあい、治していくか相談できる ⑬病気と共存する道を選択する人が居ることを知り (資料に登場する2人)、家族がそのようになれるように支えたい ⑭ (資料を読んで) 大切なのは、知らせたあとにきちんと相手を傍らで支えたり、生きがいに気づかせてあげることだと気づいた ⑮余命は知らせず、夫が一日一日生き生きと過ごせるようにしたい</p>
<p>3 告知の仕方 (2人)</p> <p>⑯告知はするが余命は言わない</p>
<p>4 自分のことは自分で知るべき (1人)</p> <p>⑰自分のことは自分が一番把握しておきたい</p>
<p>5 いずれわかる (1人)</p> <p>⑱体調の悪化から、隠し通すことは難しい</p>
告知しない (1人)
⑲ガンであることを知りたい人でも、知れば落ち込むことは明らかであるから

わからない・決められない（2人）

- ⑳病気と共に生きることの捉え方は人それぞれで、性格などを考慮しないと決められない
㉑どこまで自分が口出しをしていいのかわかりにくく、気持ちを知っていく中で慎重に決断したい

6. 読み物資料に対する感想の分類結果

読み物資料の読後感想の内容を分類した結果及びその代表例を表3に示した。

読後感想は、表3に示すように、A患者に対する理解、B患者との関わり方、C自己理解、D患者を支える人・事柄、E患者の生き方が与える勇気・魅力、F病気の受けとめ方の多様性、G不安、の7つに分類された。

最も多いのは、A「患者に対する理解」であり、その内容は、1「病気を生きることの葛藤・不安」、2「患者の気遣い・気持ち」、3「病気と向き合う前向きな生き方」の3つに分けられた。1つ目は、病気を知って、受けとめて、前向きに生きるまでの苦しみ、自分の体調変化が死につながることを知って生きることへの強い不安など、「病気を生きることの葛藤・不安」である。前向きに生きている患者も、闘病生活の辛さや苦しみと闘いながら生きていることを理解した、という内容である。2つ目は、患者の周囲への気遣いや、態度の裏側にある不安や焦りの気持ちなど、「患者の気遣い・気持ち」である。日常の些細なことで起こる患者の感情の微妙な起伏は、闘病者でなければ想像が難しく、それを読み物資料から読み取っている。3つ目は、葛藤を抱えつつも病気と向き合い、明るく、前向きに生きる生き方などの、「病気と向き合う前向きな生き方」があることへの気づきであった。患者の葛藤や気持ち、生き方についての理解や気づきを読み物資料から得たと考えられる。

次いで多いのは、B「患者との関わり方」である。これについては、読み物資料の手記の内容が関わっている。手記では、患者を思いやって掛ける言葉が必ずしも患者の支えにならない場合があること、病状と余命は切り離して伝えることなど、生死につながる病を抱える当事者の繊細な気持ちに気づいた、当事者に寄り添う関わりとは何かについて考えさせられたという内容である。自分が相手を励ますために掛けた言葉が、相手を傷つけてしまう可能性があること、相手の立場に立って考えることの難しさや大切さなどについて、読み物資料によって新たな気づきを与えられたことが示唆された。資料読後に行われた2回目のモラルジレンマ課題の理由づけでは、「告知」の仕方（表2の3）、告知後の夫との関わり（表2の2）など、1回目よりも患者と向き合う当事者意識が高い内容が現れていた。患者との関わり方についての気づきによって、1回目よりも「告知」を自分に引き寄せ、自分事として告知を判断したと考えられる。

3番目に多いのは、C「自己理解」である。内容は、1「先入観を改める」、2「他人事のように捉えていた自分への気づき」、3「当事者でないとわからないことへの気づき」である。これは、自分の理解の状態を理解すること、客観的に自分を見つめ、自分の考えや理解の状態を知るメタ認知の内容である。Aの「患者理解」やB「患者との関わり方」の内容からも明らかのように、ガンという病気を抱えて生きることについて、自分の理解が偏っていたこと、自分に思い込みがあったこと、わかっていたつもりだったが自分の理解が表層的であったこと、漠然とした偏狭なことしか自分は思い及ばなかったことなど、自分自身のふりかえりが促されていた。読み物資料から患者の闘病の実態を知り、自らをふりかえり、考えを改め、深めたと考えられる。

その他には、患者を支える患者仲間や家族、仕事などが患者を絶望から搦り上げ、辛さに耐える支えになっていることへの気づき（D「患者を支える人・事柄」）、不安を抱えつつ明るく生きる姿が人を勇気づけ、人としての生き方の魅力になっている（E「患者の生き方が与える勇気・魅力」）など、闘病生活を送る患者の生き方そのものが人々に与える勇気や、人間としての生き方のモデル

であることに気づいたという内容であった。読み物資料の導入が、道德科の目標が示すところの「人間としての生き方についての考えを深める学習」となっていることが、DやEの内容から示唆された。

表3 読み物資料に対する感想の分類結果と代表例

<p>A 患者に対する理解</p> <p>1. 病気を生きることの葛藤・不安（5人）</p> <p>①病気と向き合い、付き合っていくには、多くの葛藤がある</p> <p>②病気と共存して生きる意志がはっきりしているが、その姿勢に行き着くまで、どれだけ苦しんだのかと思うと苦しい思いになる</p> <p>③体調のちょっとした変化に泣きそうになったり、家族のことを考えたり、たくさんのことを抱えている</p> <p>④死に近づくことを自分の体でひしひしと覚えることは、本当に恐ろしく、不安の塊だと思う</p> <p>2. 患者の気遣い・気持ち（4人）</p> <p>⑤苦しいことがありながらも、明るくしようと努めている。それは、自分自身のためだけでなく、周囲の人のためでもあった</p> <p>⑥患者にしかわからない不安、周囲に自分の気持ちがわかってもらえず、あたってしまう辛さがある、ということまでわからなかった</p> <p>⑦自分の気持ちを萎えさせず、家族を暗くさせないようにしている気遣いの大変さを思った。死の間際でも、家族の気持ちを考えているのは凄いこと</p> <p>3. 病気と向き合う前向きな生き方（6人）</p> <p>⑧ガンを告知されても、現実を受け入れ、今を一生懸命に明るく、前向きに生きている</p> <p>⑨残された時間を思い切り懸命に生きることが、体に良い影響を与えると、感じた</p> <p>⑩ポジティブにガンと向き合っている。笑顔や楽しさという言葉を使い、前向きに、自分の人生とガンに向き合っている</p>
<p>B 患者との関わり方（8人）</p> <p>⑪病状と余命を徹底して切り離すことが必要とあり、そうすることで寿命を全うすることもできることがある</p> <p>⑫不安になるところに寄り添い、命の期限を考えず、守り続ける気持ちでいることが大切と気づくことができた</p> <p>⑬どんな言葉をかけるか、自信がなくなった</p> <p>⑭「前向きに生きよう」という言葉が、死期を覚悟する人にとってどのような意味を持つか、改めてその言葉の重さに気が付いた</p>
<p>C 自己理解</p> <p>1. 先入観を改める（3人）</p> <p>⑮ガンに対してネガティブな悪いイメージばかり思いついてしまうが、前向きにガンと付き合い、生きることには強い喜びを持つ人がいることを知った</p> <p>⑯（資料に掲載されている患者が詠んだ）句に、ガンは我々を即死させる病気ではないからありがたい、という言葉があり、ガンに対する見方が変化。時間を与え、様々なことを考えさせてくれる病気、という捉え方もあると知った</p>

2. 他人事のように捉えていた自分への気づき (1人)

⑰実際にガンになったことがないから、他人事のように考えていたと記事を読んで思った

3. 当事者でないといけないことへの気づき (2人)

⑱「前向きに残りの人生を楽しもう」という言葉が医師からかけられると、見捨てられたように感じるという指摘は、患者本人だから感じられるのであろう、印象深い

⑲知識やドキュメンタリーなどでわかったつもりになっていても、病気の本人にしか理解できないこともある

D 患者を支える人・事柄 (3人)

⑳何か一つ支えがあるだけで、絶望の中には落ち続けられないと思う

㉑(身内の患者の例では)患者集会に行ったり、好きなことをしたり、仕事も続けて楽しそうに過ごしている。やはり仕事や家族のような何か支えになるものがあるから、それがないと辛いと思う

E 患者の生き方が与える勇気・魅力 (2人)

㉒不安を抱えて生きつつも、明るく生きていこうとする姿は、他の人も勇気づける

㉓ガンがなくなって生きることができることが一番だが、残りわずかもかもしれない人生を楽しく生きようとしている二人は素敵だ

F 病気の受け止め方の多様性 (2人)

㉔病気(ガン)の捉え方は人それぞれ

㉕病気のことを口に出さない、出たくない人と、口に出して表現することで真剣に向き合う人、いろいろな受け止め方の人がいる

G 不安 (2人)

㉖忘れようとしても、体調が病気を思い出させることが、怖い

㉗自分のがんになったとしたら、不安になって、いつもそのことを頭のどこかで考えてしまうのではないかと思った

V 考察と今後の課題

1. 課題の捉え直しを促す読み物資料の導入

モラルジレンマ課題の1回目と2回目を比較すると、病気の告知の判断はほとんど変化が見られなかった。しかし、判断理由では、1回目には夫の「仕事」、「やりたいこと」、「やり残したこと」など、病気によって奪われてしまう「短い命」、確実に訪れる「命の終末」に強く注意が向けられ、「残りの人生を悔いなく、やり残すことなく生きる」ために告知が必要と考えられていた。

しかし、読み物資料で闘病生活に支えとなる活動や人を見だし、病苦や不安や焦る気持ちと格闘しながらも、病気を抱えて前向きに生きようとする患者の一端に触れることで、「病気と向き合う」、「現実と向き合う」など、「命の終末」や「死」ではなく、病気を抱えながら「生きる」こと、つまり、命が尽き果てるまでの「生」を「病気と向き合うこと」と捉え直して、2回目の告知判断をしたことが、判断理由や資料読後の感想から示唆された。1回目は告知対象である夫を、「命の終末」や「病死」に向かう人と捉えていたが、2回目では、夫について、病気を抱えて「生きようとする人」

と捉え、告知について考えたと推察できる。つまり、読み物資料を手がかりとして、問題状況の捉え方に変化が起こったといえよう。

また、1回目の判断は、課題文章の情報にのみ頼るため、判断材料が乏しく、限られた情報から想像したガン患者像を手がかりに、告知を考えなければならなかった。しかし、2回目は、病気と共存する生き方など、ガン患者の生活に関するリアルで、生の声を含む情報に触れ、判断の根拠が1回目よりもかなり豊かになった。読み物資料によって、判断の根拠となる情報が多様で、豊かになり、このことが、課題の捉え直しを促すことにつながったと考えられる。1回目よりも、広く、より深く考えることが可能となったと考えられる。

課題を捉え直し、考えを深めていくためには、考える活動に必要な情報を豊かにすることが重要であることが示された。しかしその際には、課題を通して考えさせたいねらいや、考えを深める方向性に沿った情報を用意することが重要であり、提供する情報の質や内容について、指導者が熟慮し、選択することが大切といえよう。

2. 自分事として課題を引き寄せる読み物資料の導入

先の結果から、読み物資料によって、課題を「他人事」から「自分事」として捉えようとする変化がみられた。ここで取り上げたモラルジレンマ課題の内容が、健康に生活を送っている者には自分事と受けとめることが難しい問題であること、登場人物が病気の夫への告知の決断に逡巡する妻という設定も、若い未婚者である学生には自分とのつながりを感じにくい設定である。また、夫の病状や仕事、日常生活などの情報量も少ないため、判断材料が乏しく、1回目では、課題を自分に引き寄せて考えることが難しかったと考えられる。

しかし、2回目には、闘病者についての資料を読み、患者の不安や焦り、苦悩などの気持ちや、日常の些細な出来事による感情の変化、思いやりの言葉が患者に辛さを与えてしまう患者の繊細な気持ち、病気と共存しようとする前向きな生き方など、現実味のある情報に触れることができた。それによって、患者の不安や恐怖が1回目よりも自分事として感じられるようになり、そのことが告知判断に反映されていた。また、読後感想には、病気の親族や知人を見守った自分自身の体験に触れる記述が4件あった。1回目の理由付けには、そうした言及が全くなかったことから、2回目には課題が自分に引き寄せられたと推測できる。また、2回目の判断理由や感想の内容には、告知後の患者との関わりについての記述も多くみられ、闘病生活を支える妻の立場を自分事として捉えていたことも示された。1回目では、夫が告知後の生き方を自己決定することに意識が集中していたが、2回目は夫とともに病気と闘う意識が高められ、どのように支えるかについての言及が増えており、これも課題を自分事として捉えたことの証左と考えられる。

課題を自分に引き寄せ、自分事として考え、自分の生活や生き方につなげられるような工夫がこれからの道德指導に求められている。今回導入した読み物資料は、課題を自分事として捉え、自我関与を強める上で有効であることが示された。今回の読み物資料は、課題の当事者の現実に即した情報が豊富に具体的に含まれていること、また、体験者のリアルな心情、生の声が綴られており、こうした読み物資料の内容が、課題を自分事として引き寄せる手がかりとなったと考えられる。今後は教材として用いる資料の情報の内容や特質についても検討が必要である。

3. 自己理解を深める指導方法

資料読後の感想に、自分の先入観が改められた、自分は課題を他人事と捉えていた、わかっていくつもりだったなど、客観的に自分を見つめなおし、自己理解を深める内容が含まれていた。青年期は自分の思考や認識、理解の状態を客観的に捉え見つめ直すメタ認知が発達する(楠見, 1995)。自分の認識や思考などのメタ認知に直接言及した感想は少数であったが、この少数の感想を生徒たちがクラスで共有することにより、多くの生徒が自分の見方・考え方の変化を意識化できると考え

られる。なぜならば、ほとんどの大学生たちが資料を読むことで、闘病者の気持ちや考え、たくましい生き方に強い印象を受け、新たな発見があったと感想で述べているからである。

道德教育では、対象についての認識を改め、理解を深めるのみならず、自分自身の見方や考え方の成長や変化を実感し、自己理解を深め、日常生活や生き方につなげていく指導が求められている。とりわけ進路や職業選択を問われる青年期においては、新たなものの見方や考え方を得ること、多様な生き方や考え方に触れて日常生活で直面する困難や悩み、葛藤、課題に立ち向かう力を得ること、人生を生き抜く力を得て成長している自分を実感することが重要である。今回の読み物資料を通して、自らの理解をふりかえり、改め、考え方の深化につながったと考えられるが、このような自己の変化の自覚を促す指導が道德教育には必要であり、生徒同士の読後感想の共有化などにより、自分の変化に意識を向けさせ、自己理解を促す指導を検討していくことが必要と考えられる。

4. 今後の課題

ここで使用した読み物資料は、いずれもガンの告知を受け、前向きに闘病生活を送る事例であった。しかし、告知によって全ての患者がこのように前向きに、たくましく闘病生活を生き抜くとは限らない。告知を控える事が賢明な選択となる場合もあるだろう。告知のマイナス面や、告知をしないことが闘病生活にプラスに働く事例もあるはずで、このような事にも目を向け、情報を提示し、多様で、多角的な視点から課題を捉え直すことが必要である。病気に立ち向かう強さの背後にある闘病者の苦闘、闘病者を支える家族の煩悶や苦悩にも目を向け、一面的に結論を導くことのないよう、多面的、多角的に考えを深める指導について検討することが必要である。

ここで示した読み物資料を導入したモラルジレンマ課題の取り組みは、大学生の個別活動によって行われた。判断理由や読み物資料の感想の内容からもわかるように、大学生の多様な考えや見方、とらえ方が現れていた。多様な考えや見方を集団で共有することによって、個々の考えが深まり、豊かな見方や捉え方がなされ、また自己理解も促されることによって、個々人なりの新たな解や生き方の発見につながることを期待できる。つまり、道德教育において「考える」活動と「議論する」活動をつなぎ合わせる実践的な指導方法の検討も今後の課題である。

また、発達段階を考慮した指導方法と教材内容の検討も進めなければならない。ここでは、青年期後期の大学生を対象としたモラルジレンマ課題と読み物資料の取り組みを検討したが、小学生や中学生、高校生、即ち児童期から青年期のそれぞれ発達に応じた課題設定や読み物教材の適切な選択が必要である。発達に応じた理解可能な教材、興味・関心を喚起する課題や教材の検討を欠くことはできない。

さらに、これまで行われてきた多様な「問題解決的学習」や「体験的な学習」による道德指導実践の蓄積にも目を向け、自我関与を深め、課題を自分事として捉えて考える活動が活性化される道德の指導方法として積極的に活用することも視野に入れていく必要がある。引き続き今後の課題としていきたい。

注

注1 教育再生実行会議については首相官邸「教育再生実行会議の開催について」を引用。 <http://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouikusaisei/kaisai.html>, 2016年10月20日最終アクセス。

注2 教育再生実行会議 提言「いじめの問題等への対応について」(第一次提言), 平成25年2月26日, <http://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouikusaisei/teigen.html>, 2016年10月20日最終アクセス。

注3 道德教育の充実に関する懇談会「今後の道德教育の改善・充実方策について(報告)」, 平成25年12月26日, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/096/houkoku/1343013.htm, 2016年10月20日最終アクセス。

- 注4 文部科学省「道德に係る教育課程の改善等について（答申）（中教審第176号）」，平成26年10月21日，
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1352890.htm，2016年10月20日最終アクセス。
- 注5 道德教育に係る評価等の在り方に関する専門家会議「『特別の教科 道德』の指導方法・評価等について（報告）」，平成28年7月22日 http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/08/15/1375482_2.pdf，2016年10月23日最終アクセス。
- 注6 中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」，平成28年8月26日，http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/gaiyou/1377051.htm，2016年10月23日最終アクセス。
- 注7 文部科学省が平成24年5～6月に実施した「道德教育実施状況調査」の結果概要（http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2013/01/04/1282847_1.pdf，2016年10月25日最終アクセス）によれば，道德の時間に使用した教材では，「民間の教材会社で開発・刊行した読み物資料」が小・中学校合わせて84.7%，「都道府県等で開発・刊行した読み物資料」60%，書籍・雑誌57.9%，新聞記事56%など，読み物資料教材の利用が多いことが示されている。

引用文献

- 荒木紀幸（1988）道德性の発達に関するコールバーグ理論，荒木紀幸編著『道德教育はこうすればおもしろい』，北大路書房，p. 12-25.
- 荒木紀幸編著（1997）『続 道德教育はこうすればおもしろい』，北大路書房.
- 道德教育に係る評価等の在り方に関する専門家会議（2016）『『特別の教科 道德』の指導方法・評価等について（報告）』，p. 6.
- 楠見孝（1995）「青年期の認知発達と知識獲得」落合良行・楠見孝編著『講座 生涯発達心理学4 自己への問い直し－青年期－』金子書房，p. 57-88.
- 丸山屋敏（1997）本当のやさしさとは，荒木紀幸編著『続 道德教育はこうすればおもしろい』，北大路書房，p. 261.
- 文部科学省（2014）道德に係る教育課程の改善等について（答申）（中教審第176号），p. 4.
- 文部科学省（2015a）『中学校学習指導要領解説 特別の教科 道德編』，p. 2.
- 文部科学省（2015b）『中学校学習指導要領解説 特別の教科 道德編』，p. 94.